

第4回 信州須坂まちの元気創出推進委員会

議事録

【日時】 令和3年4月9日（金） 13:30～16:05

【場所】 生涯学習センター（旧中央公民館）3階ホール

【内容】

1. 開会
2. あいさつ
3. 議事
 - (1)2020 年度事業報告
「2020 年度事業報告」「ブランディング」「回遊性向上のための交通検討業務」
「文化財・お宝（魅力まるごと電子ブック構築事業（アプリ・WEB サイト）」
 - (2)推進委員会 2020 年度決算報告
「まちの元気創出推進委員会」に係る予算について
 - (3)2021 年度事業計画について
 - ・事業説明「文化振興事業」「回遊促進事業」「産業振興事業」
 - ・発注方法について
 - ・2021 年度予算について
4. その他
 - (1)今後の予定について
5. 閉会

【出席者】

28名

（委員8名 市関係者7名 事務局5名 事業者5名 アドバイザー3名）

【オンライン参加】

事業戦略構築・産業振興事業支援共同事業体（（株）JTB 総合研究所（株）事業開発推進機構）、（一財）長野経済研究所、（合同）DMM.com

【資料】

- ・次第
- ・席次
- ・2020 年度事業報告書
- ・2020 年信州須坂まちの元気創出推進委員会 収支決算書
- ・文化振興事業実施事業（案）
- ・回遊促進事業実施事業（案）
- ・産業振興事業実施事業（案）
- ・2021 年度 収支予算書

【会議内容】

1. 開会

2. あいさつ 委員長

信州須坂まちの元気創出推進委員会は第4回目になる。地域資源を活かしたまると博物館構想により、地方創生交付金事業に取り組むために本委員会を設立した。委員・専門部会・委託事業者・アドバイザーの方々の協力のおかげで2年目を迎えることができたことに感謝申し上げます。本日は2020年度の事業報告と決算報告をさせていただく。2021年度の事業計画についても審議を頂きたい。前回の委員会で審議した交付金を申請し、全額交付が決定したので、その内容で進めていく。委員の皆様には2年目3年目に向けてさらなる協力をお願いしたい。

3. 議事

(1)2020 年度事業報告

「2020 年度事業報告」「ブランディング」「回遊性向上のための交通検討業務」
「文化財・お宝（魅力まると電子ブック構築事業（アプリ・WEB サイト）」

①ブランディング

●説明：共同事業体

●質疑

委員長：ロゴマークやキービジュアルをこの場で決める必要は無いが、ブランディングの考え方についてご意見を頂きたい。

委員：ロゴマークはカラーの物を拝見したが、これで良いと思う。キービジュアルについても、まると博物館らしくて良いと思う。キービジュアルはホームページで見たときのスクロールも想定した場合、A・B・C案それぞれを織り交ぜることを検討していただきたい。

委員：ロゴマークはD案で決定なのか。

事務局：決定である。

委員：委員だけでなく若い方が選ぶ場面があると興味を持っていただく入り口になると思う。決まったと思うにはまだ早いと感じる。

委員長：ロゴマークはD案に既に決定してしまっているのか。

事務局：委員の皆様や部会の皆様にも意見を伺っている。若手の職員に見ていただいたりもしている。D案で決まりということにさせていただきたい。

委員長：ロゴマークはD案でお願いしたい。早くロゴマークを決定し、まると博物館をしっかり普及させていきたいという考えがある。花房さんの意見はどうか。

委員：ファックスを見て、D案を選びそれで良いと思った。

委員長：いろいろな意見があるが、ロゴはD案に決定ということで承認していただきたい。キービジュアルはまだ検討中ということなのか。

事務局：検討中である。JTBさんと詰めさせていただきたい。

委員長：検討結果は次回に示す形になる。キービジュアルについて、久保田委員の意見はどうか。

委員：どの案が良いのかまだ考え中である。よくある動くキービジュアルなのか。

事務局：今は静止画で考えている。

委員：実現には予算的な制限があるということか。

事務局：予算内でできるアレンジを検討したいと考えている。

委員：次に何が出てくるだろうというわくわく感がない。出来れば動くものを入れていただきたいと思う。

委員長：ロゴマークやキービジュアルについては提案していただいたご意見を参考にしながら検討し次回に示したい。ブランディングについてはこの案のとおり進める。

②2020 年度事業報告

回遊性向上のための交通検討業務

文化財・お宝（魅力まるごと電子ブック構築事業（アプリ・WEB サイト）

●説明：事務局

●質疑

委員長：交通検討委員会の関係について、どのような形で進んでいるのか。

事務局：2022 年度にも向けて回遊に関わる成果品を出していきながら、今年度は公共交通の回遊と市民バスについて、またレンタサイクル(E バイク)、タクシーなどの身近な多岐の交通手段を含めて検討中である。

委員長：アプリや公共交通検討委員会との関係について、石田委員にご意見を伺いたい。

委員：ざっと見たところなので、今のところ特に意見は無い。

委員長：これからいくらでも修正したいと考えているので、多くのご意見を頂きたい。

長野経済研究所：事業報告書に、3月17日の第6回文化振興部会を追加していただきたい。

(2)推進委員会 2020 年度決算報告

「まちの元気創出推進委員会」に係る予算について

●説明：監事

●質疑 なし

委員長：決算書について、承認頂いたということでよろしいか。

(全員同意)

(3) 2021 年度事業計画について

①文化振興事業

●事業説明：長野経済研究所

●質疑：

委員長：これは小中学生をメインターゲットとした体験型プログラムについてである。内藤委員の意見はどうか。

委員：今説明頂いたことの基本的な柱はできていると思う。「子供」のイメージがはっきりしないので、須坂の将来を担う小中学生をメインのターゲットにする形が良いと感じる。さらに小中学生に限定せず大人も参加し共に進めた方が良い。また体験プログラムの中身が分かりにくい

めに文化振興に関わりたい人が参加しにくいことがあったので、プロモーション化には大変意義があると感じる。

委員：体験型プログラムのメインターゲットが小中学生であることは良いと思うが、市民にとってプログラムは小中学生の物と思われる感がある。20代に興味を持ってプログラムに参加いただき、彼らのやっていることにチャレンジすることがかっこいいと小中学生が思い参加する形にするのも良いと思う。

長野経済研究所：山崎委員のおっしゃる通りである。世代や学年を超えて学び合う風土を作っていきたい。お知恵を頂きながら進めていきたい。

委員：無関心層から関心層に変えることについて長らく考えてきた。長野経済研究所さんから提案頂いたこの形で良いと思うが、同じことをただ続けていても人は現状維持かまたは減っていくだけで、無関心層は関心層に簡単には変わらない。資料にある②の効果的なプロモーション手法の実証は面白いと思う。出来上がったものを見せるのではなく、バックヤードツアーや工場見学など、出来上がるまでの過程の部分や普段見られない裏側の部分を見せることで無関心層に関心が生まれると思う。そうしたことを事業に盛り込んでいただきたい。例えば自身が行っている博物館ボランティアガイドでは毎年カレンダーを作り市民に認知していただいて販売しているが、出来上がるまでの職員の方の素材集めや資料収集といった過程をグーライトのケーブルテレビに番組として流してもらいたい。紙芝居も上演の様子が放送されているが、その制作にかかる努力も取り上げていただきたい。そうした情報発信の積み重ねによって、実際にターゲットが市内を回る際に分かりやすくなると思う。いきなり現地を回るのでは今までと同じになるので、改善できない。関心層に変える際にメディアを使うのが良いのではないか。SNSではなくお金をかけて実施することが必要であると感じる。

長野経済研究所：文字よりも映像の方が市民に伝わると感じる。ケーブルテレビのグーライトさんと連携していきたい。

事業戦略構築共同企業体：石田委員の意見は私たちが考えていることと近い。以前日本ハムファイターズが人気球団になるまでの過程で、選手のプライベート等の今まで見えなかった情報を発信することによって無関心層の関心を掴んだことがあった。そのものを見せるよりも裏側を見せることが効果的であった例である。同じことが須坂市で実現できると感じる。無関心層を関心層に変えるためには、今までやったことが無いバックヤード等の情報発信は有効であると感じる。

委員：ターゲットの小中学生は毎週勉強や部活で忙しく、体験型プログラムを作ったとしてもいつ参加できるのか疑問である。また文化振興に力をいれるとスポーツ振興の子供の参加が減り、結局人の取り合いになる。ほとんどの生徒の土日が部活等で埋まっているが、どのような打開策があるか。

長野経済研究所：石田委員や内藤委員から同じような指摘を他からも頂いている。学校の総合の授業の中で行うことも可能だと思うので検討していく。指摘頂いたことをもとにどうすれば子供たちに参加してもらえるか考えていきたい。

委員：学校と連動し総合の時間を文化振興のために使っていけるようにしたい。

教育部長：すでに決まっている授業計画の中に体験型プログラムを入れ込むことは非常に厳しい。大人の考えたプログラムに子供が関心を持ってそれが広がることはなかなか難しいと感じる。子供は土日は忙しいので、かなり計画を練らないと現実的に難しいと思う。それよりも子供に課題を与え、それについてアプリで調べ学習をする方が興味を持てるのではないか。そこから興味を広げる方法を研究した方が良いと思う。

委員長：全ての子供でなくても良い。出来るだけ多くの子供に興味を持ってもらえる方法を考えていきたい。

委員：「見える化」として映像などの活用を考えられており、時代に合っていて良いと思う。もう一つ提案として、須坂の文化の中で、現地に出掛けるのではなく、よりどころとなる場所で年1, 2回何かやる計画も可能なのではないか。例えば5つの施設でならば年5回できる。そのような場を活かす方法を考えることも今後重要であると感じる。

委員長：まると博物館事業において文化振興はメインである。

②回遊促進事業

●事業説明：DMM.com

●質疑：

委員長：回遊促進事業には最も多くの予算を割いている。ハード事業についても一番導入している。来年度事業についての意見を皆さんから頂きたい。電動スクーターによって回遊性を持たせる事業は来年度の事業になるのか。

DMM：来年度の検討事業である。バスの利便性を最大限に高めることが第一段階である。その上で足りない部分をスクーター等で補完する計画である。

委員：バスの本数の増加は可能なのか。

DMM：本数の増加とルート設計・変更を市民課で進めている。バスロケーションシステムを使うとバスの利用状況がデータで可視化される。弊社が提供するデータを材料として最終的に市の方で対応していただく。

委員：市民の方が便利になると観光客も乗りやすくなると思うので、期待している。

信州地域デザインセンター：県内各自治体からの公共交通の課題の相談は多い。話を聞くと地域の方が一度も公共交通を使ったことがないことが多い。是非事務局や市職員の方が実際に乗ってみて調べてみることを進める。

環境部長：市民バスは年間10万人の利用が目標だが到達せず、利用者が増えない状況である。2021年度は基盤整備に加えてランニングコストの問題にも目を向ける必要があると感じる。来年度公共交通の見直しを行う上で本数・ダイヤについてもいただいたご意見をもとに考えていきたい。

委員長：データが公共交通計画に活かされると考えたい。

まちづくり推進部長：インター地域の開発には時間がかかる。大きなショッピングモールができる。そこには年間600~800万人の来客を見込んでおり、観光の集客施設という位置づけでもある。長野県の北信地域に来る観光客の方に立ち寄っていただきたいと考えているが、そうした人々が須坂市も回っていけるようにするため、インター開発地域の中での須坂市の紹介もできるように準備したい。公共交通もその中に取り入れながら須坂市民がショッピングモールに行くだけではなく、開発地域の人が市街地（須坂市）に来ていただくこともまると博物館事業の中でも検討している。

委員長：公共の交流施設である大久保家のコミュニティスペースでの賑わい創出への貢献について、また観光案内看板のデザイン制作・設置事業についてのご意見があればお聞かせ願いたい。

委員：特に意見は無い。提案どおりに進めてほしい。文化振興のターゲットは市内の小中学生であったが、外部の方についての視点が無ければお客さんが来ないのではないか。文化振興でもお客さんの来るようなイベントを考えた方が良い。回遊振興は大事なことなので進めて欲しいと思う。

DMM：須坂市内だけでなく他の市のシェアも視野に入れたい。長野市などの近隣市民を取り組む可能性について考えていきたい。花房委員からお知恵を頂きたい。

委員：例えば田んぼアート、フラワーアートで流行の鬼滅の刃の主人公を描くなどのイベントも考えてみてはどうだろうか。

事業戦略構築共同事業体：提案いただいたバックヤードツアーや田んぼアートといった取り組みから市街の方を呼び込むことによって賑わいを創出し、そこから市外の方を取り込むスパイラルを生むと考えている。文化振興と回遊振興が同じ方向に向かい連携することが重要である。

③産業振興事業

●事業説明：産業振興事業支援共同事業体

●質疑：

委員：須坂市のぶどうやりんごは品質が良く評価が高いが、一年通して提供することは手配の手間がかかり、冷蔵は値段が張るなどといった理由から無理な状況である。JA では年間を通して旬のフルーツを提供する研究を進めているところである。JA としては 10 数年来、須高地区のぶどう祭りを北部体育館で行ってきた。ブランド化が進み質・価格も良いということで県内外から 2,000 名を超える来場者があり、会場の容量が限界であった。駐車場も無く、行列が数百メートルにもなり、受け入れ態勢が整っていないので地元で行うことが難しい。市長から JA でやって欲しいという期待もあったが、出来れば須坂市内でどこか違う場所を検討している。良い知恵があれば頂きたい。

委員長：大阪大学の教授が、地方活性化には農業振興が必要であると言っていた。直売所・農家レストラン・六次産業化の 3 つが活性化に必要ということである。これが須坂市にも当てはまる事だと思う。産業振興に繋がれば良いと感じる。

産業振興部長：エコシステム構築の(2)事業者マッチングによる域内取引の促進、(3)地元特産品の加工促進による域内販売量の増加 については実施してきている。(2)については長野市・須坂市・千曲市を主体として事業者マッチングを行っている。須坂市独自のものであるがどれだけ加工業者や販売業者の方にきていただけるかが課題である。また(3)については味噌を活用したワンハンドフードやフルーツを使ったスイーツの開発なども既に過去に実施している。トシヨロイツカでスイーツ開発等を行ってきており、その時の商品を扱うお菓子屋さんは 1 社のみで、ほとんど波及していない。また地方創生推進交付金を使って信州須坂フルーツエールの開発を行ってきた。開発は年齢層・値段・作る人・場所が決まり買っていたかかないと利益を生まない。開発に 2 年 3 年かければ効果的な事業になると思う。ドライフルーツや冷凍フルーツを考えてはいるが、旬のものが一番美味しいので、難しいところである。開発の進め方についてご意見があれば伺いたい。

産業振興事業支援共同事業体：ぶどう・りんごの販売イメージは農家レストランであった。静岡ではいちごハウスを経営する方が家族で土産屋を改築してソフトクリームやいちごの生食を提供するお店を開いており、若い客もかなり入っていた。そこで農家レストランや農家カフェは観光消費を上げるという意味で有用だと感じた。以前果物街道でりんごなどを購入させていただいた際に須坂市にはそうしたものを見かけなかった。例えばプレハブやテントといった形でそうした取り組みを仕掛けることによって人の賑わいを増やせると思う。これを回遊促進や文化振興と同時進行させることによって推進力を付けられるのではないかと思う。

委員長：スイーツや土産品について、成功事例を調査してほしい。

総務部長：ふるさと納税の成果は農産物人気によって一昨年 13 億円、昨年 14 億円の実績があった。コロナで先行きが見えないこともあるので、今後は継続的な取り組みを工夫したい。関係人口については須坂市が総合戦略の中で移住支援が成果を上げている。また色々な人材を使っていくという意味で、須坂市の若手の製造業に注目している。彼らは様々な研究会を開いており、県内外へのルートを多く持っているので取り込んでいきたいと考えている。

委員長：関係人口の増加については、どうやって戦略的に行うかが大切である。この提案の通り進めてもらいたい。

④各事業の発注方法について、2021 年度予算について

●説明：事務局

●質疑：なし

委員長：事業計画の内容・発注方法・予算について原案のとおりで良いか採決を取る。このまま進めていくことで良いか。

(全員同意)

4. その他

(1)今後の予定について

●説明：事務局

●質疑：なし

委員長：事業を行うに当たって、新しい生活様式の下で出来る限り実施していかなければならないと考えている。感染対策を行いながらプロモーション事業も行っていく。その考え方について意見を伺いたい。

委員：事業全体について、とにかく感染予防をしっかりと実践すればやっていけないということは無い。対面での仕事や事業は伝えるという面で非常に重要と考えているので、マスクや感染対策アプリなどを活用し、上手くコロナウイルス折り合いをつけながら実現していただきたい。

委員長：これからも感染対策をしっかりと行っていく。

(2)全体通して質疑

委員：ロゴマークは誰の考案か。

事業戦略構築共同事業体：我々が考えた。

委員：須坂市民にもロゴマーク考案・決定に参加してもらうことが実現できれば浸透しやすいのではないか。産業振興も文化振興もインスタ映えする商品を考案することで人が来るようになると思う。またバスに乗りたくなるような特典のある回遊振興というものも集客につなげられると思う。

委員長：ロゴマークについて様々な意見があるが、まず如何に浸透させていくかが重要である。まると博物館事業を象徴できるマークにするためには内容をよく理解している関係者の意見が大事だと考えていた。市民に内容を説明する機会がとれないために、今回はそういう選択を取った。

決定した以上はロゴマークを浸透させることに委員の皆さんのお力をお借りしたいと考えている。

委員：須坂市の30年代～40年代の街なみの賑わいは大きかったが、今は無い。須坂駅から富士通、地方事務所への人の流れがなくなった。大型店が撤退し、主婦がいなくなった。商業高校と創成高校が合体して、商業高校のほうには人が来ない。駅から臥竜公園までの道のりの北側が空洞化している。街全体に魅力的なものを置き、元気にしていかないと人が流れない。人が歩かない街で事業を行っても成功するか心配している。行政担当の方には街の中心部の活性化を考えていただきたい。特に駅前の一等地のショッピングセンターは農産物や観光の拠点として活用したいという意見は多い。

委員長：街中に賑わいを持たせるためにインター地域のショッピングセンターの集客を活かしながら行う事業である。無関心層を関心層に変え、須坂市の資源に対する誇りを持ってもらい、須坂市にいらっしゃる方に文化資源を見てもらいたい。それが市の回遊性を高め、産業振興にも繋がる。上手く運営できるかどうかは委員や市民の力に懸かっていると思っている。街中に賑わいを持たせるという事業の趣旨を理解いただいて委員や市民の皆様にご協力いただきたい。

5. 閉会